

## 残像抄(5)

## 『芳名録』より —上野直昭先生—

## 大和文華館 館長 石澤正男

私は「美のたより」29号から38号にかけて「大和文華館の生立」と題して、ともすれば忘れ去られてしまうおそれのある大和文華館設立にまつわる挿話を織りまぜて、大和文華館の歴史を一通りまとめて活字にしておきました。紙面の制約や調査の不備などから書き漏らした点が相当あることは否定できませんが、とにかく創立に関与された人々が健在の間と思って書いたのです。というのも大和文華館の生みの親である元近鉄社長の種田虎雄氏は早く昭和23年に世を去られました。また、種田氏の全幅の信頼を受けて美術品の蒐集を大成されたのは初代館長の矢代幸雄先生ですが、先生は亡くなる数年前から健康を害され、昭和50年5月25日について逝去されました。そのため、「美のたより」33号と34号は「大和文華館の生立」を一時中断しました。

大和文華館は今秋10月31日に第20回の創立記念日を迎えることになります。吾々館員はこの機会に飛躍的な発展を希望し、種々具体案を検討しておりますが、まだ読者の皆様に御報告する段階には至っておりません。多分、「美のたより」52号には具体的な輪郭を御報告できると考えております。

大和文華館では、最初に仮の事務所をおいた南河内の道明寺時代(1946~1952年)から来訪者の御署名をいただくための「芳名録」を用意してあります。その後、事務所を大阪市東区船越町に移し、船

越町時代(1952年7月~1965年10月)となるのですが、その頃から美術品の総数も大分増加し、矢代先生御自慢の名品もふえてきました。先生は名品が入手されると、親しい友人たちに得意満面で吹聴されたものですから、当時の交通事情の不便な時にも拘らず東京をはじめ遠隔地からの来訪者が矢代先生の在阪時に船越町へ来訪されています。従って多くの場合、少くも4、5名、多い時には20数名のグループで来訪されています。

この欄で、これから何回かにわたり、『芳名録』にお名前を誌していかれた方々のうち、前館長が親しくされていた多くの人々のうち、私も存じあげている方々、特に美術に関係の深い人々を、年代順に挙げ、それらの人々の、いわばプロフィールとでもいう程度のことをお伝えしておきたいと思っております。中心となるのは、いうまでもなく1965年秋に大和文華館が私立とはいえ、立派な公共的施設として発足した時からですが、それまでの準備期間であった14年間の来訪者にもざっと触れておきたいと思っております。

最初の芳名録は矢代先生の筆で表紙に「芳名録 道明寺時代」と書かれ、表紙を開くと、同じく矢代先生の筆で「来観者芳名録 於道明寺 大和文華館」と三行に分けて、表紙と同様縦書きに書かれています。そして、最初に署名された方は、有名な美術史学者の上野直昭先生(1883~1973)でありま

した。

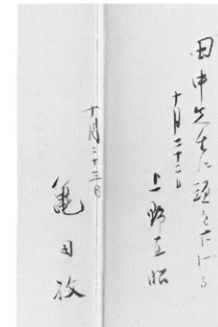
上野先生の署名は、流暢な草書に近い書体で、「昭和二十四年五月二十五日 上野直昭」と書かれています。『芳名録』は既に用意されていたに違いありませんが、矢代先生は、この人を、と思うほどの人の来訪がないままに、それまではだれにも署名を頼まれなかったのだろうと、私は勝手に想像しています。

ここで上野先生の経歴をご簡単に御紹介しますと、先生は1908年に東京帝国大学の文科大学哲学科を卒業されてから65年に及ぶ長い間、美学・美術史学者としての多くの著作その他の業績を残されました。また京城帝国大学教授、ベルリンの日本研究所長兼ベルリン大学講師、九州帝国大学教授(京城大と兼務)として講壇に立たれました。その後、1941年3月から1944年5月末まで大阪市立美術館長として美術館運営に携わっております。大阪市立美術館長を辞められるとすぐ、乞われて東京美術学校長に就任されました。

その頃の美術学校は和田英作(1874~1959)校長が1936年に退官されたあと、2代にわたり文部官僚出身の校長が続き、長年の宿弊が重なり、沈滞の極致に陥っていたため、思い切った改革が要望されていた時でした。その大改革を断行する人として白羽の矢を立てられたのが上野先生でした。先生は全教授、助教授に辞表の提出をもとめ、退官してもらいたい人々の



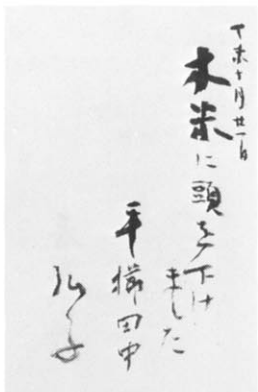
上野直昭先生



『芳名録』より('67-10-22)

辞表だけを受理し、留ってもらいたい人々の辞表は却下されたのです。この思い切った処置が円滑に行われたことは、先生の人望と、当時の学校内にわだかまっていた宿弊が甚しいものであったこと、時機が大東亜戦争のさなかであったこともあずかって有利に作用したと考えられます。その結果、建築科と工芸科を除き、日本画科、油絵科及び彫刻科の教官は一新してしまいました。日本画の安田鞆彦、小林古径、前田青邨、油絵の梅原龍三郎、安井曾太郎、彫刻の平橋田中、石井鶴三の諸氏が新に迎えられた陣容の主な人々でした。別な見方をすれば官展を牛耳っていた人々がしりぞけられ、在野の錚錚たる作家が新に迎えられたこととなります。

先生は1949年東京美術学校と東京音楽学校が合体して東京芸術大学になった時、初代の学長に就任されたのですが、それまで学習院院長と初代の国立博物館館長を兼ねておられた安倍能成(1883~1966)先生が兼任を辞して学習院院長に専任されることになった機会に、同年の4月から国立博物館館長を兼務されました。南河内の道明寺に矢代前館長を訪問されたのは上野先生が芸大学長と博物館



『芳名録』より('67-10-21)

青木木米作 交趾手竜鳳  
文香炉(個人所蔵)

長を兼ねられて間もない時であったこととなります。この頃は、大和文華館のために購入された美術品は400件を超え、その中には旧原三溪翁愛蔵の国宝2件、重要文化財11件、重要美術品1件、合わせて14件も含まれていました。そのとき、矢代館長は上野先生にこれらの名品をお見せしたにちがいありません。

上野先生は、僅か半年で博物館長を辞任され、東京芸大学長専任として四期間勤められ、1961年に退官されました。その後1963年に愛知県立芸術大学の創立に関与され、初代学長として単身赴任され、亡くなる前年まで愛知芸術大学の育成に尽力されました。先生は1946年には帝国学士院会員、1959年には文化功労者に選ばれるなどの栄誉を受けられました。

大和文華館が青木木米生誕200年記念展を1967年に開催した時、上野先生が展覧を見に来られ、その時、種田さんの胸像をしげしげ見ながら、「さっぱり似ていないね」といわれました。そこで私は「先生と種田さんはどちらが先輩ですか」とお尋ねしたら、「僕の方が一年上なんだ、種田君とは水泳部が千葉県北条の江戸屋で合宿をしていた頃、よく一緒に泳いだもんだ

よ」と答えられました。先生が優れたスポーツマンであり、特に野球の選手であったことを知っていた私は、「先生の時代はまだ野球では一高が早慶をリードしていたんじゃないませんか」とお聞きしたら、「いやあ、僕の時代に始めて早慶に敗けたんだよ」と答えられたのは全く意外でした。そこで私は、一高野球史上、なかば伝説化された名選手中野老鐵山(1885~1947、本名武二、守備の堅固さから、日露戦争の旅順の難攻不落の砲台老鐵山の綽名がつけられていた)のことをお尋ねしたら、先生はあっさりと「うん、あいつはね、一年下だったがうまかった。彼がショートで僕がセカンドをやっていた」と伺って、私は全くびっくりしました。尊敬する大先輩であり、いつも美術史学界の長老のお一人として親しみを抱いていたこの上野先生が、急に伝説中の人物になられたような気がしたからです。

上の写真は木米展を御覧に、平橋田中先生(前号参照)が来訪された翌日、お見えになった上野先生の御署名で、今では貴重な記念となってしまいました。

(80-5-1)

季刊 美のたより No.51

昭和55年6月1日

発行 大和文華館